

（ 武道稽古場 生雲における対人実験 ）

師はいない。

自分でやるしかなかった。

様々な試行錯誤と体験を経て、非相対の作用を武道で実証する事を思い立つに至った。
西江水、無住心、古来より武の極致は、無我の自然（じねん）作用をその根拠とする。

禅を体認する。

十代前半より諸々の格闘技や武術に親しみながら、その中に自分が求めるものを見出せなかった。

武道で、禅の真偽を試す。自分で納得いくまでやる。

これ以上信用できる方法を思いつかなかった。

一人でどんな体験をしてみたところで認識沙汰でしかない。試された事がない者は信用できない。
他人に試される事で、独り善がりに陥ることを避けられるし、何か起れば自他共に確認できる。

まず、対人を用いる上で、その役割を将棋のように上手（うわて）と下手（したて）に分けた。
下手は認識を用い、試せる事は何でも試す。上手は認識を用いず、自然作用そのもので応じる。

こういったすべては、よく言われる理に偏った絵空事なのだろうか。

精神論に過ぎないのか。

実験には可能な限り、考えられる限り極限の厳しさを求め、怪我人も出た。
安全を犠牲にしなければ真偽の確信に至らず、欺瞞の種を残す事になる。

その危機状況で、自然作用だけの在り様に落ち着く事は難しく、本人も気づかず、認識を用いてしまう。
故に止まる、居着く、集中する、意図する、予測する等、その反応が的になり撃ち込まれる事になる。
認識としては何もしてないのに、思いがけず危機を素通りしてしまう時との落差は激しく、
皆、それが正しいのは判るが、怖いし、信じ切れない。どうしても認識を優先してしまう。

記憶に頼り、結果を期待する。

熱心で協力的な信頼関係に基づく一切の手加減を許さない実験が可能になり、
結果、当事者一同は、その認識と考え方を、置き去りにする必要に迫られた。

作用の実態が顕になった。

それは知識や記憶の行使によって踏襲できるような類のものではなく、
明らかな事実として当然のように再現され、同様に再現できなくなるものだった。

自然であるとき、上手には何ら特別な自覚はなく、対する下手は様々な状況に陥る事が判つて来た。
意図が対象を失って自分に帰って来たり、或は、認識以前に既に入り込まれているような状態だった。

また、一対多人数の実験では、味方を道具で切りつけたり、誤って自分を突き刺したりする者もいた。

下手（したて）に起きる現象には個人差があり、人によって陥るパターンが決まっていた。

衝動性や、その速度といったものが、大いに影響している事も明らかだった。

著しいと始めから攻撃の意図を生じることが出来ず、意念を生じても消滅し、抵抗、反撃の拍子と意図を失い、
無防備な状態で目前に迫られ、或は動かない相手に何もできず、動けば自滅的な状況に陥るといのが常だった。

自然の作用は、常に認識による作用を消すか素通りするかだった。

また、自らの思考、感情、衝動、動作、諸々の反応に気づく頃には、それらは既に消滅し、終わっている。
その真最中を対象として認知する事はできず、それ自体がそれ自体を消化しながら変化するのが作用だった。

区別はあれど、内外、主客といった間髪がなく、普通といえは普通でしかなかった。

自然による作用を体験できなかったという者は一人もおらず、皆一様にそういうものだという理解はできていた。
しかし自分がやったという手応えがなく、どうやったのかもわからず、なぜそれが起きたのかもわからなかった。

何もしなかったからである。

偶発的過ぎて、どうすればその状態に戻れるのか、どうすればそれを維持できるのかもわからなかった。
それを目指すと離れ、既にそうなっているという事もなかった。もう戻れない気がするという者もいた。

交通事故等、結果的に身の危機を未然に回避するなどの体験談も枚挙に暇がなかった。

また、あらゆる瞑想技法はこのシビアナ実験の中で打ち砕かれた。

幽体離脱を体験する者や、滝のような気が見えるという者、サマーデイに入り前後不覚になる者など、
何れもそれ自体に意味を与えるには実験が厳しく、実際それは素通りされる。白昼夢でしかなかった。

体験している現実は否定できないにも関わらず、意図とは無関係に、主観を投影しないものはない。
脳が自動的に解釈したことを体験するという意味において、それは想像火傷と変わらなかった。

上手（うわて）の実際は、起きる事、自体であり、それ自体がそれ自体を同時に消化している作用だった。故にそれを対象として捉える事はできず、認識で働きかけることを一切やめて、そのものである以外ない。作用は作用、自体であるが故に、作用の存在を認めることなく作用する。

だから認識としては手応えがなく、確認できない。止まることがないので、下手（したて）は的を絞れず、上手（うわて）によって縁を変えられてしまうと、その瞬間までの認識意図がぶつ切りに途切れてしまう。また、実験の中でもう一つ発見があった。

下手（したて）が相手と同化する事で主客を忘れると、上手と下手が逆転する。

このような同化の下手は丁寧で誠意がなければ成立せず、殆どの場合、逆転にまで至る事はない。二十一年間で、立ち合い中、認識を捨てて下手から上手に、その作用に至ったのは一人だけだった。

だが、優れた下手（したて）は実験において、上手（うわて）の真偽を見破る試金石となる。上手が認識の介入によって止まった瞬間、その事に上手自身が気づくより速く撃ち込む。

相手と一つになる事で主客を忘れ、自他相対が消える。撃ち込むという役割が、作用となって果たされる。相手は自分が事実から逸れ、認識を用いた証左として撃たれるのだが、本人はそれも判らない場合が多い。

認識を用いると、主体と対象に分離して必ず止まる。認識を優先して作用に遅れる。観察主体に留まる。相対に陥り、自体として消化できず、認識が介入した通りに撃ち込まれ、往々にして底う所を撃たれる。逆に上手が確かだと、下手は何も出来ず、自崩れし、その本物の作用に身をもって触れることができる。下手が崩れず、両方が確かだと相上手になり、互いに何も起きなかったり、より確かな方が無碍になる。

このような実験は、自己欺瞞に陥る事を不可能にしてくれる。

互いを点検する手段となる。

無我（不生）、無常（作用）、涅槃（消化）と言えばその通り、不生にして作用、跡形も残らない。

しかもそれは、この普通の生活の姿であり、誰もが、そのようになっていくという事実でしかない。問題はその事に気づかず、認識主体や認識対象を实体と捉え、際限の無い相対矛盾に陥る事にある。結局、如何な体験を経ても、認識主体が残る限り定まらず、自己に安定しないということになる。故に認識主体が、死に切るまで油断なく、四六時中、自己という万象、そのものである以外ない。

自己という作用が、あらゆる認識を消化し切るまで。